

瀬田川に架かる瀬田唐橋は「勢多橋」「勢多大橋」とも呼ばれた、日本史上もっとも著名な橋です。この瀬田唐橋を舞台とした物語に「依藤太百足退治」があります。昔、依藤太が勢多橋を渡ろうとした時、大蛇に変わった龍女に遭い、この願いを聞いて三上山に棲む大百足を退治するという話です。中世に成立したと考えられるこの物語には、琵琶湖の神々に関する興味深い示唆が散りばめられています。まず、龍女が藤太に自己紹介する場面を見てみましょう。「妾は近江の湖に住むなりがねの土固まりて、この秋津洲の国(日本)定まりし時より、この湖水に居を定め、七度まで桑原となりしも形貌を人に見せず。」つまり、日本開闢以来、琵琶湖に住み続けていることをあかししています。藤太は、首尾長く大百足

を退治し、竜宮に招かれ接待を受けますが、自分の置かれている場所が、「丹後の国、興謝の郡、水の江の浦島が子すなわち、浦島太郎が招かれた竜宮と同じ所と感じ取り、急ぎ暇を乞い、無事、人間界に戻る事ができました。この話からは、琵琶湖の中には、日本という国が始まったときから、龍王(水神)が棲まう世界があり、この世界は大海原の中にあるという竜宮に共通する、という概念が中世には定着していたことを示しています。そして、物語では、藤太が人間界に帰るシーンを「海中をあゆむ事利那の程と覚ゆれば、勢多の橋にぞ著かされる。」と表現し、勢多橋が人間界と竜宮の接点である

瀬田唐橋



瀬田川の底から現れた7世紀の橋脚。
この上で壬申の乱の決戦が行われた

ことを語っています。では、どうして、勢多橋が神の世界と人間界の接点になったのでしょうか。その訳は「ハシ」という言葉の意味を考えると見えてきます。「ハシ」とは「端」を表します。つまり離れているものを結びつけるものが「ハシ」なのです。向こう岸とこちらを結ぶものが「橋」であり、食べ物や物を口に結ぶものが「箸」、上下を結ぶものが「梯」なのです。ですから、「ハシ」が

神の世界と人間界を結ぶ役割を果たすことになるのです。1982年、現在の瀬田唐橋の downstream 約80mの地点の川底を発掘調査しました。調査の結果、7世紀後半の橋脚の基礎遺構、すなわち、壬申の乱(672)の「勢多大橋の戦い」の舞台となった橋脚の遺構を始め、5時期以上の勢多橋の遺構が見つかりました。そして、この調査では興味深い遺物もたくさん見つかりました。和同開珎を始めとする大量の銭、仏具、飾金具、簪などの装飾品等々。勢多橋を渡った人の落とし物でしょうか? そうではありません。これらの遺物は、様々な思いを込めて橋の下に棲まう神々に捧げた「財物」だと考えています。神と人が最も近づく場所、それが橋であり、その中でも最強のパワースポットが勢多橋なのです。今も、神々の世界と人間界の接点を見守るように、唐橋の傍らには勢多龍王宮が、静かにたたずんでいます。

人間界と竜宮の接点

(滋賀県文化財保護協会
大沼芳幸)